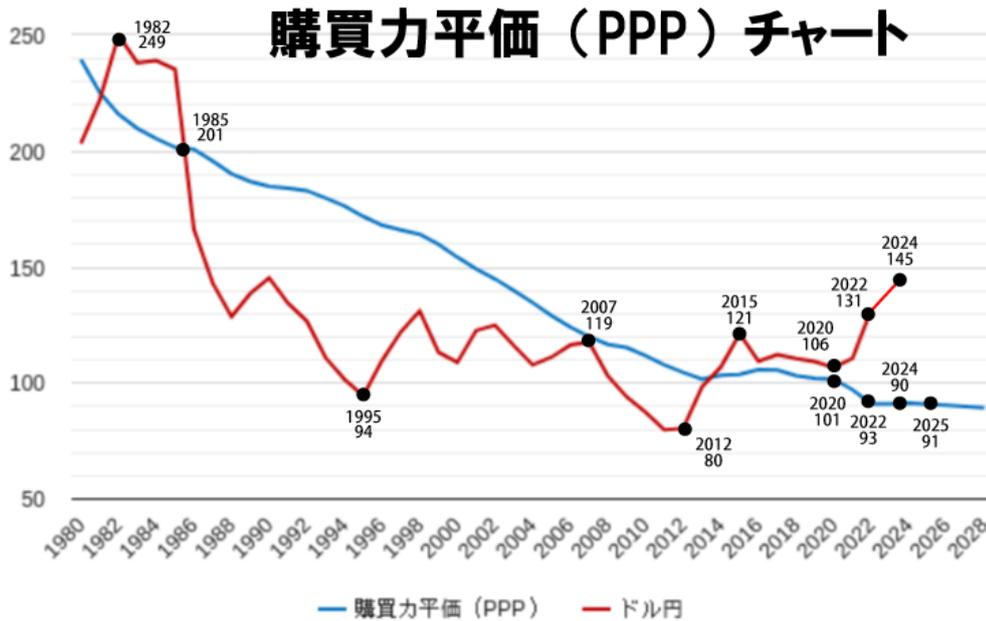




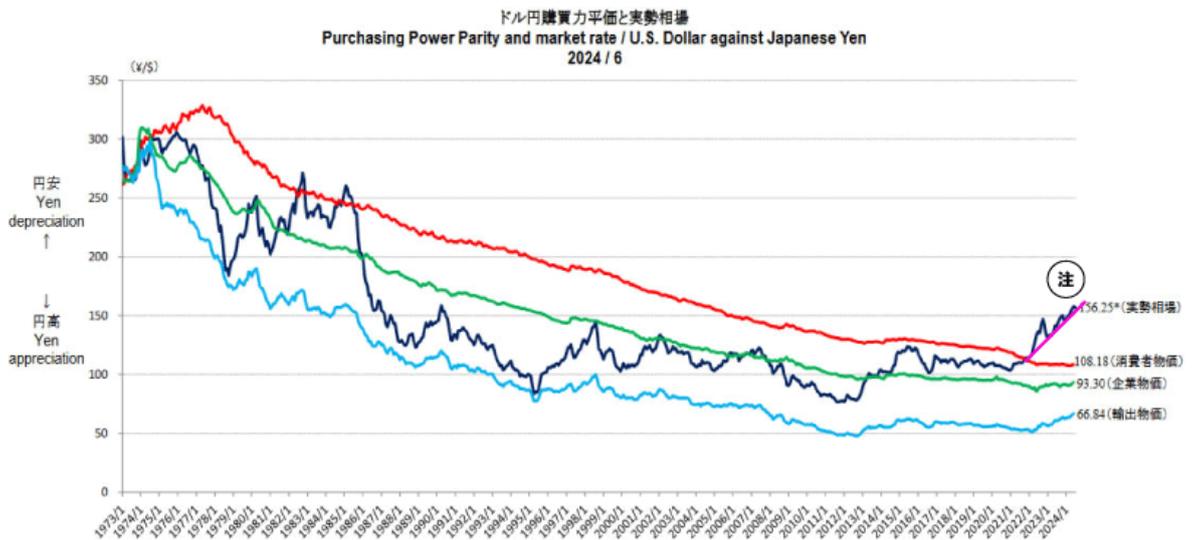
時事評論家 増田俊男

ドル・円の超予測

図①



図②



目先より大局を読むのが先。

図①はドル・円の名目(実効)と購買力平価(PPP)によるドル・円相場の推移である。名目相場は中央銀行の政策や財務省(国家)の財政政策などの影響を受ける人為的相場であり、PPPによるドル・円相場は一物一価の原則で対象国における物価(インフレ)差をもとに算出する。

2020年から名目相場でドルが急騰しているのは、FRBも日銀も新型コロナ対策でゼロ金利と緩和政策を採ったが、政府の財政バラマキと相まってインフレが加速してきたので2022年3月からFRBだけが利上げ、引締め政策を採り、日銀はマイナス金利と緩和を続けたのが主な原因である。ところが図②で1980年台からPPPによる消費者物価、企業物価、輸出物価の推移を見るとすべて名目相場より高止まりしている。

中央銀行の金融政策、政府の財政政策にかかわらず、乱れることなく円高が進行していることがわかる。

中央銀行や財務省の政策は一時的に相場に影響を与えるが、恒常的ではない。

では恒常的円高の恒常的原因は何か？

それは日本とアメリカの経済体質の違いである。

丁度日本の「和の精神」とアメリカの「競争の精神」との違いと同じである。

日本は1960-70年代のジャパン・アズ・ナンバーワン、輸出大国と言われた時代の生産過剰、供給過剰体質を解消できないで引きずっている。

すなわち日本経済はデフレ体質が続いている。

一方アメリカは、経済は常に需要が供給を上回る輸入大国でありインフレ体質である。

一物一価の原則で、現在のドル・円相場をベースにマクドナルドのビックマックの値段を日米で比較するといつでもアメリカの方が高い。

従ってチャートで円高が続いているのは常に日本との比較でアメリカの物価(インフレ率)が高いことを意味する。

日本よりアメリカのインフレ率が常に高ければドルの価値が円より下がり続けるのは当然である。

決まっていることは、どこまでも円高傾向に変わりはないが、目先は日米金融当局の政策で変わるということである。

もう一つ忘れてはならないことは、名目相場は長いレンジでは購買力正価に向かうということ。

恒常的相場トレンドと目先の相場展開を逃すことなく毎朝指南する「目からウロコの増田塾」で学びかつ儲けて下さい。

大好評発売中！増田俊男の小冊子 Vol.142

『180度変わろうとしている日本』

～そしてニッケイ平均と円相場はどうなる、これを知らないと時代遅れになる～
現在増田俊男の小冊子 Vol. 142 は**好評発売中**です。

内容は、*日本の主権者であったGHQのマッカーサーが作った現行憲法とは何かご存知ですか
*憲法第9条に書いてある言葉には「裏」があります *本当のところ自衛隊は「違憲」なのです
*「憲法解釈」という日本独特の文化 *本当に日経平均は2024年4万円、そして円は130円になりますか *年末までに何を買ったら良いかお教えします等です。

価格は、1冊4,800円(税・送料別)。詳しいご案内、お申込みについてはマスタ U.S. リサーチジャパン株式会社 (FAX: 03-3956-1313、HP: <http://chokugen.com/>) まで。

「時事直言」の文章及び文中記事の引用をご希望の方は、
事前にマスタ U.S. リサーチジャパン株式会社 (FAX: 03-3956-1313) までお知らせ下さい。